

山形県村山市・清水遺跡(3地区)出土青白磁片について

齋藤和機

I はじめに

青みを帯びた破片の出土 小さい破片はどのようなものなのか。本稿はそのような疑問に対して、小さな破片の同定を試みたものである。

東北中央道(東根-尾花沢)延伸工事に伴う平成23年度清水遺跡(3地区)の発掘調査にて、SE1051井戸跡12層(最下層)より青みを帯びた破片が出土した。破片の大きさは、約3cm×2.5cmほどの小さなものである。共伴遺物から年代を推測しようにも、SE1051井戸跡12層での破片との共伴遺物は、9世紀第3-4四半期を中心とした土師器・須恵器であるが、上層1a層の覆土中から8世紀代と思われる須恵器片が出土している。したがって破片との共伴遺物からでは、当該破片の年代を考察することが困難である。

しかし、本調査区から1点だけ出土した破片は、精巧な文様やその破片の薄さから、稀少なものであると考えた。こうした状況より、本稿では、当該破片のような稀少性の高い破片の属性を最大限に観察し、当該破片がどのような器種で、いつの年代のものであるのか考察してゆく。

II 遺跡と出土した遺構の概要

遺跡の立地と環境 清水遺跡は山形盆地の北端にある村山市清水に所在する。遺跡は東側の奥羽山脈、西側の古代より舟運で使われた最上川と出羽丘陵に囲まれ、最上川自然堤防の東側、丘陵山麓部に位置している。清水遺跡の範囲は、東西150~380m、南北1.3kmにわたり、清水集落の大半を含む。平成22年度より東北中央道(東根~尾花沢)延伸工事に伴い、清水遺跡は最南端部より1地区(平成22年度-23年度調査)、2地区(平成22

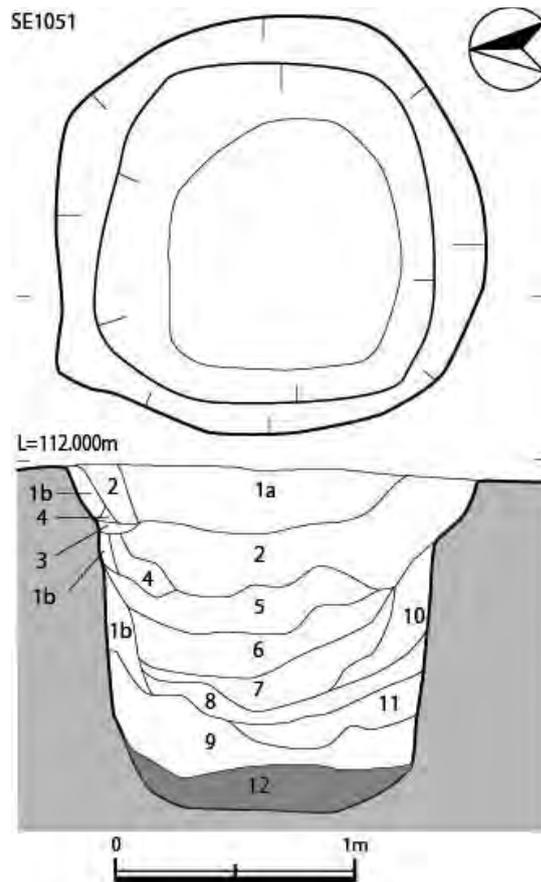


図1 SE1051井戸跡(12層から青白磁片が出土)



図2 SE1051井戸跡断面写真(東から)

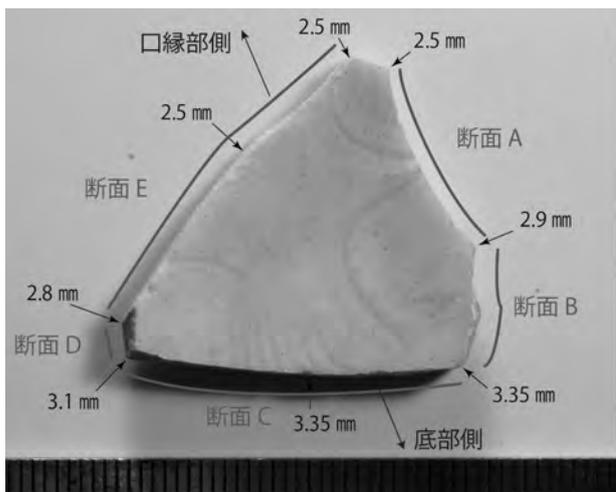


図3 青白磁片内面と各断面の厚さ

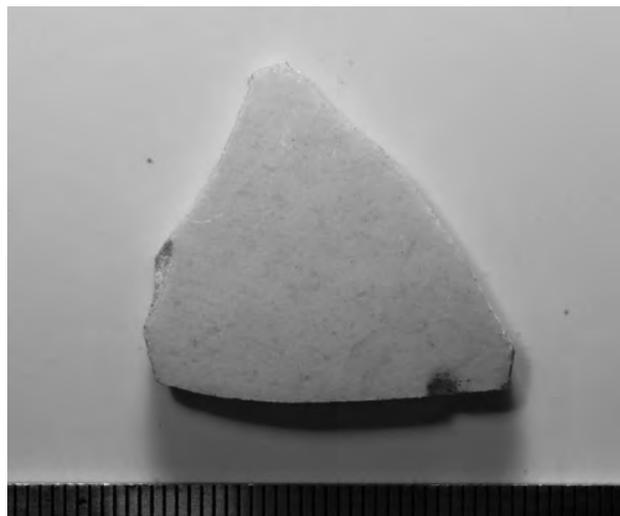


図4 青白磁片外面



図5 青白磁片断面Cの屈曲

年度－23年度調査)、3地区(平成23年度調査)、4地区(平成23年度調査)に分けられ、緊急発掘が行われた。

今回取り上げる清水遺跡3地区(調査面積5300㎡)からは、縄文時代後期から晩期にかけてと思われる陥し穴や石器の未成品と剥片の集積土坑、古代(奈良・平安期)の竪穴住居跡、土坑、井戸跡のほか、官衙関連施設と思われる掘立柱建物群、及び区画溝が確認された。官衙関連施設は出土遺物から9世紀第3-4四半期に機能していたと考えられる。

破片の出土した井戸跡 破片の出土したSE1051井戸跡は、調査区北東側の区画溝角に隣接して位置している。井戸は東西南北に約1.7mの幅を持つ隅丸方形の形をしている。深さは検出面から約1.5m。図2の堆積状況から、井戸覆土に中央部付近まで地山ブロックが多量に混入していること、前述した出土遺物の年代が堆積と逆転していることから、廃絶後に埋め戻された可能性が高いと考えられる。当該破片は、井戸跡の12層(最下層)から出土している(図1)。

III 清水遺跡(3地区)出土破片の観察

破片の色味 胎土と違い、陶磁器の釉調は、釉薬の調整や焼成温度によって同じ産地であってもややばらつきが生じる。つまりいわゆる釉薬の色味だけでは型式や産地の同定は困難であるが、その色味より大まかな白磁・青白磁・青磁といったカテゴリーで括することは可能である。清水遺跡(3地区)出土の当該破片の釉薬はわずかに青

色を帯びている。図6で内面文様のヘラ描きの部分に注目すると、削られた部分に釉薬が溜り、よりいっそう青みを帯びていることがわかる。したがってこの破片に該当するものは、青白磁および青白磁的な釉調をもつ白磁類に限られることとなる。

青白磁片の位置を復元する この青白磁片がどのようなものを同定をするにあたり、まず約3cm×2.5cmの青白磁片が、どの位置にあったのかを検討する。青白磁片の文様が屈曲する内側に描かれていることから、梅瓶・合子といった貯蔵具類は検討対象から除外され、碗・皿類のみになる。復元に際して、各断面の厚さを測定し、その結果を図3に示した。計測値をみると、断面幅の最小値が2.5mm、最大値が3.35mmと、各断面で厚さが異なることがわかる。陶磁器碗・皿類は、ロクロで成形する際に底部から口縁部に向かって粘土を伸ばしていくため、底部付近から口縁部に向かって、厚さが薄くなるという製作上の原則がある。破片の断面幅の測定した結果をこの原則で検討すると、断面幅の最大値が底部側、最小値が口縁部側と考えることができる。また図5より当該破片の断面Cが両側に屈曲していることから、破片の向きは図3のようになる。

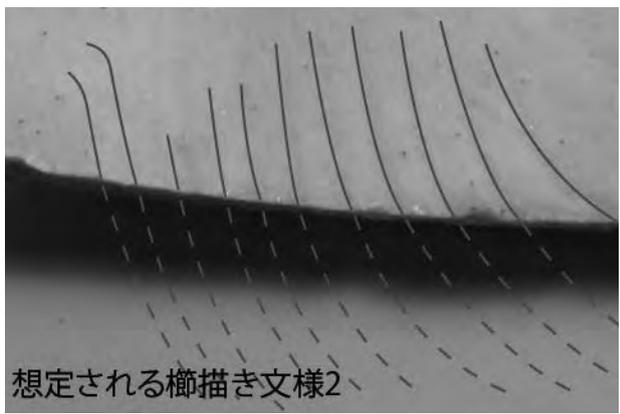
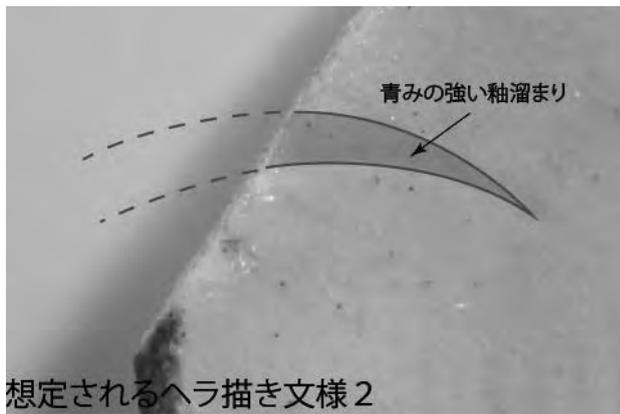
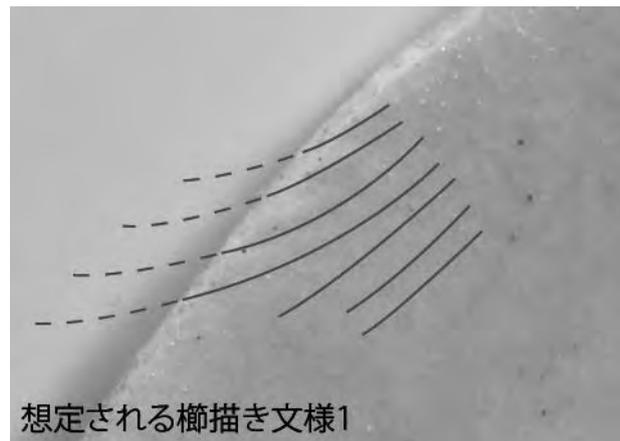
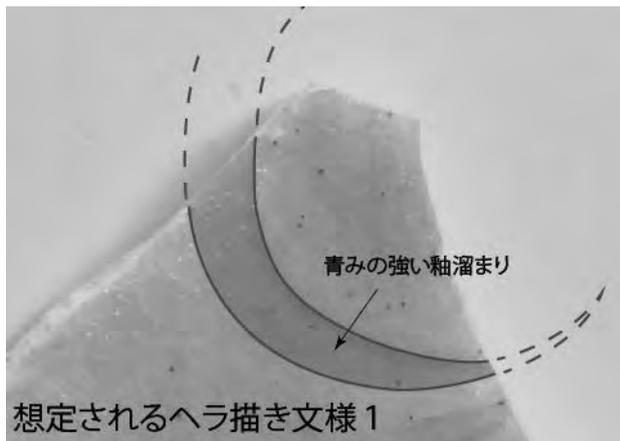


図6 想定される文様の軌跡

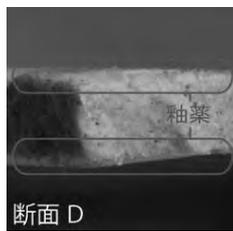
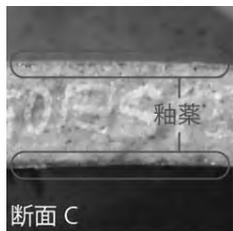
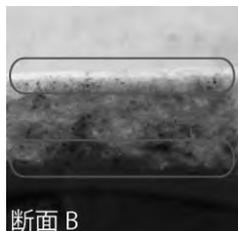
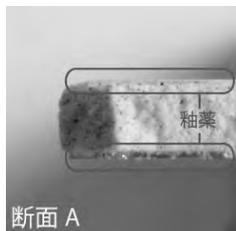


図7 各断面の釉薬の厚み

断面幅による破片の上下の向きは図3のようになったので、次に、文様より破片の位置の復元を試みる。図3より文様は破片全体にヘラ描きと櫛描きによって描かれている。当該青白磁片で確認できる文様が断片のみであるが、草花文または水波文の可能性が高い。この文様の細部を観察した結果を図6で示した。

図6より、青白磁片に施される各文様の状況から、青白磁片の遺存部位よりも文様が外へ伸びていることがわかる。さらに青白磁片の口縁部側の厚さが2.5mmと非常に薄いものである。磁器を製作する上で、内側の口縁部付近までヘラ・櫛をいれて文様を施そうとすると、その薄さでは施文時の工具による加圧によって口縁部付近が破損してしまう可能性がある。また図7より、青白磁片

各断面の釉薬をみると、釉薬は青白磁片全体に薄く均等に掛かっていることがわかる。つまり断面Aから断面Eまでの全ての断面で釉薬の厚みに差異はなく、底部に流れ込むような釉薬の厚みも見受けられない。また図4より、底部高台付近の無釉箇所も当該青白磁片には無い。したがって青白磁片口縁部側の厚さが2.5mmと薄いものであるが、前述した製作上の制限を考慮すると、ヘラ描き文様が青白磁片の上に向かって伸びていること、及び釉薬の掛かり方より、当該破片が碗・皿類の胴部中央付近にあったことがわかる。

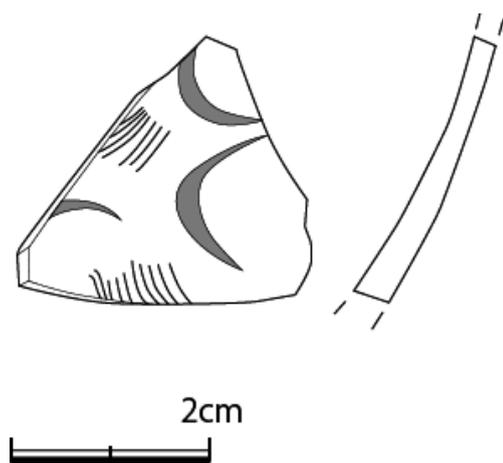


図8 青白磁片実測図

IV 器種のしぼりこみ

破片は碗か、皿か 文様が内側に描かれていることから、青白磁碗・皿類の破片であるとした。次にこの碗・皿類の2つの器種から同定を試みるが、当該青白磁片は口縁部・底部を持たないので、本稿では破片の厚さによって器種の同定を試みる。

器種同定の方法 器壁の厚さに関して、破片の断面実測図のどこの部分を照合するかによって器種が変わる。こうした恣意的な結果を避けるために本稿では、予め基準となる破片にあわせて照合箇所を規定した。具体的には、厚さによる器種検討の際に、観察で得た破片の口縁部側断面幅の最小値を、比較資料の同じ断面幅の箇所に合わせ、当該青白磁片との底部側の重なり方、厚さ、底部から口縁部への立ち上がり方の比較をする。それにより統一性と客観性を持たせることができると考えた。

比較資料の抽出 では、破片をどの資料と照合するのか。一概に青白磁碗・皿類といっても、国内出土青白磁碗・皿類の帰属年代は幅広い。大宰府白磁 XI 類を含めて 10 世紀後半から、下限は山形県内においても 14 世紀ぐらいまで少なくとも出土が確認されている。したがって、ある程度文様の有無、施文方法、器壁の薄い碗・皿類等から本稿では比較資料として抽出した。比較資料は当該破片年代考察の一つの指標とするために、国内でも青白磁の資料数が多く、編年研究と年代考察が進んでいる博多遺跡群出土資料を参考とした。

文様から検討する Ⅲ章において、青白磁片の文様の観察を行い、その観察結果より破片の内面に櫛及びへら描

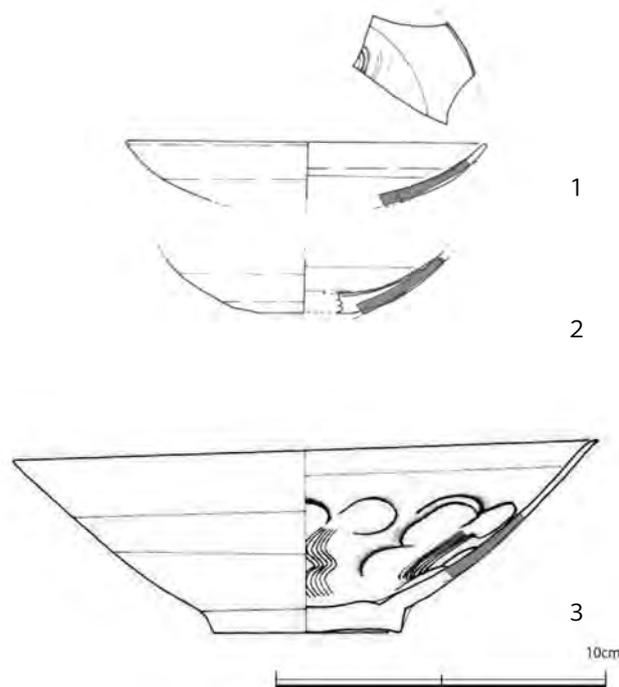


図9 博多遺跡群出土青白磁皿(1・2) 碗(3)

きにより文様が施されていることが確認された。器壁が薄く、且つこの文様が施されている青白磁碗・皿類の類例をさがして上述の資料群から探すと、図9の碗・皿類が最も類似していると思われる。図9-1の皿は、博多遺跡群第62次調査5521号土坑出土〔福岡市埋蔵文化財調査報告書第397集・1995〕の青白磁皿である。器壁は薄く、内面に当該青白磁破片と同様、櫛及びへら描きで文様が施されている。図9-2は博多遺跡群の高速鉄道関係調査(1)1号土坑(井戸)出土〔福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集・1984〕の青白磁碗である。こちらも文様は当該破片と同様である。

断面図から検討する 上述した方法で碗・皿と、当該破片の断面実測図の照合をおこない、2つの器種を検討する。図9の塗りつぶし部分が当該破片の断面実測図である。図9-1・2の皿との重なり方をみると、破片の下が皿の底部に差しかかっていることがわかる。また文様は皿の胴部中央で止まり、皿の器壁は文様の切れ目から急に立ち上がっている。次に、図9-3の碗では、破片の断面実測図は碗の文様が施されている胴部中央に収まっており、口縁部・底部にも差しかかっていない。以

上より、当該青白磁片の器種は、図9 - 3のような碗であると考えられる。

V 青白磁片の年代

清水遺跡(3地区)出土青白磁片は、図9 - 3タイプの碗類であると考えられる。ではこれらの碗類はいつ頃の年代か。博多遺跡群における同タイプの帰属年代を調べると、およそ12世紀前半以降に位置づけられるものが多い。12世紀の日宋貿易において、博多が国内唯一の集散地であったと指摘されているが(亀井1995・大庭1999)、当時の博多を宋との交易玄関口と考えるならば、清水遺跡(3地区)出土の青白磁片は12世紀前半以降と考えられる。

VI まとめ

SE1051 井戸跡の埋没 以上の観察結果から、清水遺跡(3地区)SE1051井戸跡出土青白磁片は、12世紀前半以降の青白磁碗であると考えられる。したがって最下層から当該青白磁片が出土したSE1051井戸跡は、少なくともその青白磁片の年代以降に埋没したはずである。

おわりに 清水遺跡(2・3地区)調査範囲では、12世紀代以降の中世遺物の出土は当該青白磁片1点のみであり、どのように運ばれてきたのか、またどう使われていたのか不明な点が多い。調査範囲の東側に中世遺構が存在する可能性も考えられる。今後、SE1051井戸跡がどのように埋没したのか、他の遺構とどのような関係があるのかを検証していく必要がある。また、今後博多遺跡群出土青白磁の資料を実見し、その文様と厚みを比較検討してみたい。

当該青白磁片が山形県村山市の清水遺跡(3地区)までどのように運ばれたかはまだ不明だが、12世紀の清水遺跡を含む山形県村山地方では、奥州藤原氏の影響を受けた小田島荘があった。奥州藤原氏は藤原摂関家と強い関係を結び、東北地方にある藤原摂関家の荘園経営を、任されていた。12世紀の山形県内においては、遊佐・寒河江・大曾禰・屋代荘などと共に日本海沿岸から最上川に沿って藤原摂関家の荘園が成立している。(村山市史編纂委1991) また奥州藤原氏の拠点であった岩手

県平泉遺跡群では、その存続年代の遺構から出土する青白磁が貿易陶磁の約10%を占めている(八重樫2003)。本稿で検証することはできなかったが、この青白磁片は、藤原摂関家や奥州藤原氏との関係のなかで、清水遺跡までもたらされたのかもしれない。

引用・参考文献

- 亀井明德・崔淳雨・矢部良明 1977 「宋代の輸出陶磁」『世界陶磁全集12 宋』小学館
- 横田賢次郎・森田勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について -形式分類と編年を中心にして-」『九州歴史資料館論集4』九州歴史資料館
- 福岡市教育委員会 1984 「福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告IV 博多出土貿易陶磁分類表 -高速鉄道関係調査(1)」福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集 福岡市教育委員会
- 池崎譲二・森本朝子 1984 「博多出土北宋後半期の貿易陶磁」『貿易陶磁研究 No.8』日本貿易陶磁研究会
- 山本信夫 1988 「北宋期貿易陶磁器の編年 -大宰府出土例を中心として-」『貿易陶磁研究 No.8』日本貿易陶磁研究会
- 村山市史編纂委員会 1991 「村山市史 原始・古代・中世編」村山市
- 福岡市教育委員会 1995 「博多48 -博多遺跡群第62次調査の概要-福岡市埋蔵文化財調査報告書第397集」福岡市教育委員会
- 亀井明德 1995 「日宋貿易関係の展開」『岩波講座 日本通史6』岩波書店
- 森本朝子 1997 「博多出土の貿易陶磁 -その分類試案」『博多研究会誌 No.8』博多研究会
- 大庭康時 1999 「集散地遺跡としての博多」『日本史研究』No.448
- 太宰府市教育委員会 2000 「大宰府条坊跡 XV-陶磁器分類編-」太宰府市の文化財第49集 太宰府市教育委員会
- 八重樫忠郎 2003 「奥羽における輸入陶磁器の受容」『中世奥羽の土器・陶磁器』東北中世考古学会